

英語教育におけるESDの視点を持った 授業展開

学籍番号 199316

氏名 草竹 建次

主指導教員 箱崎 雄子

1. はじめに

近年、SDGs (Sustainable Development for Goals) が注目されている。SDGs とは 2015 年 9 月に国連サミットで採択された国連 193 国が 2016 年から 2030 年までに達成すべき 17 の目標のことである。17 のゴールの内容として環境・経済・社会の諸課題に関連するものとなっており、持続可能な社会を実現するために、それらの諸課題を統合的に解決することが必要とされている。教育においても、現代的諸課題について知るとともに、解決するために ESD が実践されている。ESD とは Education for Sustainable Development (持続可能な開発のための教育) のことで、持続可能な社会を実現させるために行われる教育である。ESD では現代社会の課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組む (think globally, act locally) ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指している。この ESD はユネスコスクールを中心に、開発教育や環境教育、人権教育、ジェンダー教育、多文化教育などの実践が総合的な学習の時間や特別活動、教科教育など教科の域を超えて行われてきた。

2. 研究の目的

2.1 研究の目的

日本の学校教育において開発教育・国際理解教育を題材にその歴史や教材を調べると、学校教育において、開発教育の実践形式には、教科教育の中で授業内容と絡めて行う教科融合型、「総合的な学習の時間」において参加型・体験型をベースとした学校現場によって特色のある教科統合型、課題について教科を超えて学習する場で実践する教科超越型の三つのアプローチがある。それぞれに課題が存在するが、とくに教科融合型においては、現場の教員が参考になる授業案を探しにくく、また、時間を限られているため、開発教育の導入が困難であることがわかった。

これまで英語教育の中でも国際理解教育や自然環境、今日的課題 (人権、平和、共生、防災、安全) などの内容が取り扱われている。英語という国際共通語としての立ち位置から、英語教育という観点から社会との関わりや課題を扱うことに意義があり、授業実践と

して発展させていくことが必要となる。そのため、ユネスコスクールに認定されている大阪市の公立中学校で実習して、英語科の授業法を学ぶとともに、英語教育におけるESDの有効な点はどのようなものか、また、欠点や留意事項について検証していくことを目的としている。

4. 中学校における英語科のESDについて

ESDは政府も推進しており、学習指導要領の英語の記述の中でも「外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。」が記載されている。

これまで、英語科においても多くの学校でESDが実践されてきた。具体的にはCLILを実践している学校や、一部の英語に特化した学校など、学力が比較的高い学校において実践されてきた。その内容として、英語で議論することや、ポスターセッションでの発表、実際に海外に行き、ボランティアとして海外の地球的な諸課題について英語を交えて参加型・体験型学習を行う事がある。しかし、学力が比較的低い学校の英語科においてESDが行われている例は少なく、英語の授業としてESDを扱うことが難しく感じた。しかし、学校全体として考えることで、総合的な学習の時間や特別活動などで行われるESDの内容と関連付けさせて、知識の教授だけでなく、ESDが目指す生徒の理想像や地域の解決したい内容を触れることで、意義のある内容になることが分かった。

まとめ

教育実践研究の目的は、英語科教育とESD双方に関連する論文を読んだり、学会に参加したりして、英語科におけるESDの実践事例を収集し、実際の授業を観察し、ESDの実践事例の成果や課題を検討することで、中学校という学校現場で使用できるように調整することである。

本研究において、ESDを行うには一つの教科や総合的な学習の時間、特別活動などの特定の教科だけの授業ではなく、学校全体としてESDを取り扱い、目指すべき生徒像や学校目標、具体的なビジョンを教員、生徒、地域を含めて実践する必要がある。

そして、英語科においてESDを取り扱うにあたり、知識の教授に留まらないために、生徒たちが学んできた既習事項から、学ぶ意欲を引き出すことや、開発教育のように気付きを与えて、学習させることが必要となる。